

卒業研究報告書

題目

情報倫理教育における e ラーニングのための プラットフォームの開発

指導教員

井口 信和 教授

報告者

17-1-037-0054

栗岡 陽平

近畿大学理工学部情報学科

令和 XX 年 Y 月 Z 日提出

概要

総務省が令和元年に 37182 人に行った調査によると、インターネット利用者の割合は 9 割に迫るところまで増加している [1]。インターネットの利用率が増加する中、インターネットの利用理由としてあげられるものの内の一つとして SNS が存在する。

この SNS において平成 27 年にみずほ情報総研株式会社が 1178 人に行った調査研究 [2] によると、SNS 上でトラブルの経験があると回答した割合は 15% 程であった。トラブルの内容は、自分自身の発言が他人に異なる意味で受け取られてしまう、自分の意志とは関係なく個人情報などが他人に公開されてしまう等である。

このようなトラブルを避けるために情報倫理教育が必要である。情報倫理教育の内容として個人情報の保護、人権侵害、コンピュータ犯罪等がある。これらの教育は特にインターネットの利用において重要である [3]。

そこで本研究では、情報倫理教育に関する学習と教育を支援することを目的に、情報倫理に関するコンテンツを提供可能とするプラットフォーム (以下、本プラットフォーム) を開発する。本プラットフォームを用いることで、情報倫理に関するコンテンツを web 上で管理、提供できる。これにより情報倫理を学ぶ際、コンテンツを用いて学習することにより、トラブルの減少やリテラシーの向上が期待できる。

目次

1	序論	1
1.1	本研究の背景	1
1.2	本研究の目的	1
1.3	本報告書の構成	1
2	使用技術	2
2.1	Docker	2
2.2	Golang	2
2.3	Python	2
2.4	PostgreSQL	2
2.5	その他関連技術	2
3	研究内容	3
3.1	図, 表のキャプションと参照	3
3.2	参考文献の引用	3
3.3	各節の引用	4
4	実験・考察	5
5	結論・今後の課題	6
	謝辞	7
	付録 A 付録について	9

1 序論

1.1 本研究の背景

総務省が令和元年に 37182 人に行った調査によると、インターネット利用者の割合は 9 割に迫るところまで増加している [1]。インターネットの利用率が増加する中、インターネットの利用理由としてあげられるものの内の一つとして SNS が存在する。

この SNS において平成 27 年にみずほ情報総研株式会社が 1178 人に行った調査研究 [2] によると、SNS 上でトラブルの経験があると回答した割合は 15% 程であった。トラブルの内容は、自分自身の発言が他人に異なる意味で受け取られてしまう、自分の意志とは関係なく個人情報などが他人に公開されてしまう等である。

このようなトラブルを避けるために情報倫理教育が必要である。情報倫理教育の内容として個人情報の保護、人権侵害、コンピュータ犯罪等がある。これらの教育は特にインターネットの利用において重要である [3]。

1.2 本研究の目的

本研究では、情報倫理教育に関する学習と教育を支援することを目的に、情報倫理に関するコンテンツを提供可能とするプラットフォーム (以下、本プラットフォーム) を開発する。本プラットフォームを用いることで、情報倫理に関するコンテンツを web 上で管理、提供できる。これにより情報倫理を学ぶ際、コンテンツを用いて学習することにより、トラブルの減少やリテラシーの向上が期待できる。

1.3 本報告書の構成

第 2 章では、本研究で使用した技術について述べる。

第 3 章では、本研究の内容について述べる。

第 4 章では、実施した利用評価実験について述べる。

第 5 章では、本研究の結論と今後の課題について述べる。

2 使用技術

本章では，本研究で使用した技術について述べる．

2.1 Docker

2.2 Golang

2.3 Python

2.3.1 Django

2.4 PostgreSQL

2.5 その他関連技術

3 研究内容

研究についての具体的な内容を2節以降で記述する。各節のタイトルは任意。ただし結論、今後の課題、謝辞、参考文献など、論文としての常識的な項目は必ず入れなければならない。詳しくは卒業研究担当教員の指導に従うこと。

3.1 図、表のキャプションと参照

図や表には必ず題名と参照番号を記述すること。参照番号は `label` を使って自動的に作成するようにし、`ref` を使って本文中で参照できるようにしておく。

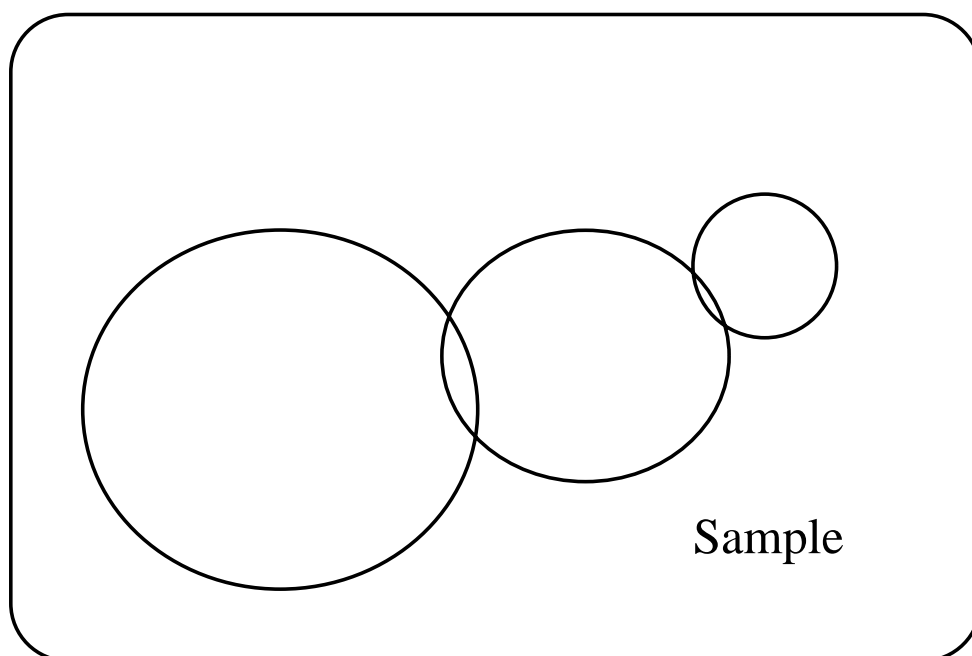


図 1 図の例

図や表を入れた場合、必ず図の参照番号を使った文章が本文中にあるはずである。例えば次のようにすればよい。図 1 は図のサンプルである。T_EX のソースを見ると図の入れ方がわかる。

図が単独で現れ、本文中に何の説明もなければ、ただのページ稼ぎと見なされる。

3.2 参考文献の引用

参考文献は、本研究が十分な調査活動を基礎として成り立っていることを明示する、大変重要な項目である。研究で参考とした文献のリストを論文の終わりに入れ、それらの文献に関係のある記述部分や、文献に書いてある文章の引用を本文内で行なっている箇所には必ず参考文献の番号を入れなければならない。例えば次のようにすれば良い。本手引きや予稿の手引きを作成する際、文献 [?] を参考にした。また L^AT_EX の各種コマンドに関する説明は文献 [?] を参考にした。T_EX [?] とは、Knuth によって作られた組版用のソフトウェアの

ことである。文献 [?] は、論文を参照する場合のサンプルである。

本手引き書では `bibitem` を用いて直接参考文献リストを本文末尾に記入しているが、出来れば文献データベースから参考文献リストを自動的に作成する `BibTeX` 等を使用した方が良い。本手引き書の `LaTeX` ソースと共に、`BibTeX` のデータベースファイルも配布する。`BibTeX` の詳しい使用方法については、文献 [?] 等 `LaTeX` の参考書を参照のこと。

3.3 各節の引用

各節にも `label` をつけておいて、後の節で節番号を使って自動的に引用番号を記述できるようにしておくとうまいだろう。例えば次のようにすれば良い。1 節で述べた目的を達成するため、本節では次のような方法を用いた場合について述べる。...

`label` と `ref` を用いた参照は図のキャプションや `section`, `subsection` だけでなく、数式等にも使えるので、番号を手でつけることは出来るだけ控え、自動的な番号づけと参照を行ない間違いのない文章になるようにしよう。

4 実験・考察

5 結論・今後の課題

本報告書の結論や，研究の過程で明らかになった今後の課題等を記述する．

謝辞

指導を受けた教員や、本研究を完成するにあたって支援を受けた研究室の諸氏に対しお礼の言葉を、独立したページに記述する。詳しくは卒業研究担当教員の指導に従うこと。

参考文献

- [1] 総務省. 令和元年通信利用動向調査の結果. 入手先<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/200529_1.pdf>. 参照 (2020-12-11).
- [2] みずほ情報総研株式会社. 社会課題解決のための新たな ict サービス・技術への人々の意識に関する調査研究-報告書-. 入手先<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/linkdata/h27_06_houkoku.pdf>. 参照 (2020-12-11).
- [3] 文部科学省. 第 5 章 情報モラル教育:文部科学省. 入手先<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/056/shiryo/attach/1249674.htm>. 参照 (2020-12-11).

付録 A 付録について

本研究で作成したプログラムのソースファイルなどを卒業研究報告書に含めたい場合は、付録として巻末にまとめておく。